# 日本の万年筆のパイオニア　並木良輔

万年筆愛好家　上岡　修

パイロット万年筆は、日本で広く知られていますが、「並木良輔」を知っている人はほとんどいないでしょう。彼こそ、我が熊谷の先人にして現在のパイロット万年筆の創業者であります。並木は明治十三年、市内の玉井に生まれ、今年で生誕百三十五年になります。

彼は東京高等商船学校（現在の東京海洋大学）を卒業し、商船の船乗りになりました。後年、母校商船学校の教授に迎えられ、製図用具の開発を行う中で、大衆に広く使える万年筆ができないものかと考えていました。万年筆は、当時舶来の高価なもので、百パーセント国産のものはまだありませんでした。並木は、その後、商船学校教授を辞し、万年筆の開発・製造に没頭します。やがて、我が国で初めてペン先の先端にイリジウムを溶着した金ペンの開発に成功します。

大正七年、彼は最初に並木製作所を創業し、その後同窓の和田正雄の協力を得て、昭和十三年、自分の出身でもある水先案内人の名を冠したパイロット万年筆株式会社（現在の株式会社派パイロットコーポレーション）を創設しました、

その後、彼は万年筆の価値を高めるため、キャップや胴軸部分に日本の伝統工芸である蒔絵を施した万年筆を世界で初めて完成させます。それは海外で大変な評判を呼び、蒔絵万年筆は日本の高級万年筆の代名詞となり、万年筆メーカーとしてのパイロットを不動のものにしていきました。

そして昭和五年、ロンドンの海軍軍縮条約調印式には、各国の全権代表が、この蒔絵万年筆で署名をするほどの栄誉に浴することができました。

また、事業経営においては、造る者、売る者、使う者のいずれが損をし、いずれが得をしても商売は成り立たないという「三者鼎立」を社是に掲げました。これは、事業とは単なる利益追求の手段ではなく、世界に通用する質の高い商品をつくり、日本人の心意気を世界に示すことでありました。彼の経営理念は、企業を起こして事業に励み、そのことを通して国家、社会に貢献するという、今日最も求められている「企業の社会的責任」に通ずる先駆的なものでした。

現在、筆記用具は、ボールペンやシャープペンをはじめとして多様なものであふれています。このような中で、万年筆が見直され静かなブームになってきています。万年筆はインクの濃淡により、柔らかな味わいのある表現ができることもあり、万年筆ファンの作家も少なくありません。外国製の万年筆のほとんどは、中字か太字です。横書きのアルファベットを書くのに適しているからです。日本製の万年筆の良さは細字にあります。画数の多い漢字を書くためには、インクの流れを最小限に抑える必要があります。太字でなめらかなペンを作るのは比較

的容易ですが、細字でなめらかなペンを作るには高度な技術が必要とされます。

表情豊かな万年筆の筆跡には、自分の足跡と思えるほど時間の蓄積や経験がにじみ出るような気がします。ボールペンやシャープペンは、便利なものですが、その画一的な線に書き手の心を表現する十分な機能はないように思います。ゆっくり時間をかけて手紙を書きたいときや、大切な何かに署名するときなどには、万年筆で書きたくなります。

万年筆で原稿を書く作家は、一、二行書いたら、文字が乾くまで待たなければ成りません。その待つリズムが次の文章の質を高めることにつながるのだといいます。

今年も印刷の賀状の中から、万年筆の筆跡のあるものを見ると、書き手の人柄とともに、ほのかな温かみを感じます。速さを主体とするデジタル社会の中で、ゆったりと流れるアナログのひとときをもつことの大切さを痛感します。

東京の京橋に万年筆の歴史と先人の偉業をたたえたパイロットの「万年筆ミュージアム」があります。その中の最高級蒔絵万年筆のシリーズを「NAMIKI」といいます。

夏のひととき、東京散策とともに郷土の先人の足跡を訊ねてみてはいかがでしょうか！

（熊谷市公連だより　第 19 号　平成 27 年より）